

## 第2回北海道SDGs推進懇談会 議事録

日時：平成30年8月22日（水）14：00～

場所：かでの2. 7 6階620会議室

### 【出席者】

○構成員：有坂 美紀、大崎 美佳、柏村 章夫、小泉 雅弘、定森 光  
清水 誓幸、菅原 亜都子、鈴木 昭徳、野吾 奈穂子、吉中 厚裕

【五十音順、敬称略】

【10名出席】

○北海道：谷内計画推進担当局長、石川計画推進課長、渡邊計画推進課主幹

### （石川計画推進課長）

ご案内の時間になりましたので、ただ今から第2回目の北海道SDGs推進懇談会を開催させていただきます。本日は大変お忙しい中、出席いただきまして、誠にありがとうございます。前回の懇談会の開催結果でございますけれども、先日、皆様にご確認いただきまして、道庁のホームページで公開をさせていただきました。本日の懇談会の開催結果につきましても、同じように公開させていただく予定でございますので、よろしく願いいたします。なお、本日の終了時間でございますが、16時を目処としてやらせていただければと思いますので、御協力の程、よろしく願いいたします。それでは、開会にあたりまして、谷内計画推進局長からご挨拶させていただきます。

### （谷内計画推進担当局長）

計画推進担当局長の谷内です。本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。また、先月の第1回目の懇談会では、大変貴重な、様々なご意見をいただきましたこと、お礼を申し上げます。いただいたご意見につきましては、この後事務局から、今後どういった対応をしていくかということについて、ご説明をさせていただきます。また、これからのビジョンの取りまとめにあたり、先立ってのご意見や本日のご議論などを踏まえて、策定を進めていきたいと考えております。今、ビジョンの原案となるものを取りまとめ中でございます。9月の上旬に原案を公表したいと思っておりますけれども、その中では、この間、骨子（案）でお示ししているものに肉付けをして、優先課題や対応方向、あるいは色々な主体の方々が具体的な取組をイメージできるような「取組イメージ」みたいなものを、わかりやすくビジョンの中に盛り込んでいきたいと思っております。そうしたことの参考となるようなご提案なども今回いただければと考えております。また、先立っての懇談会でもご説明申し上げました、SDGsの取組の裾野を広げていくための全道的なネットワークの立ち上げについてでございます。今月初めから募集を開始しておりますけれども、今日段階で103の企業・団体・個人あるいは市町村から申し込みいただいております。募集期間の設定が短かったので、まだ順次集まってきているところですが、今月中には一旦締め切るよう

な形で、ネットワークを正式な形で立ち上げて、色々な情報共有を進めていきたいと思えます。まだおそらく、参加していただける方々が増えてくるのではないかと考えていますが、そういった取組の広がりもどんどん進めて行きたいと考えています。今日も時間は2時間程ですが、また、北海道内のSDGsの推進に向けた様々なご意見を頂戴できればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(石川計画推進課長)

それでは、ここから議事の進行につきましては、大変恐縮でございますけれども、座長の吉中先生にお願いしたいと思えます。よろしくお願い致します。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

お暑い中お集まりいただきましてありがとうございます。前回に引き続き、進行役ということで座長を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。お手元に資料が配られているかと思えます。議事次第の下に配付資料ということで資料1から資料4までリストがあり、議事次第の後に付いていて、その後に皆様からの具体的なご提案・ご提言の資料を付けていただいているかと思えます。よろしいでしょうか。今日の議事で予定されているのが2つ。1つ目が「(仮称)北海道SDGs推進ビジョン」について、2つ目が「北海道SDGs推進ネットワークについて」ということで、局長からもお話があったと思えます。道庁から用意していただいた資料1から資料4で、議事2つをカバーするような形になっています。前回の議論で申し上げましたが、推進ネットワークというのがビジョンを実行していく上で肝となるのではないかと私を私では考えていますが、そういうこともあり、2つの議題を合わせて道庁からご説明いただいて、その後に皆様からの資料をそれぞれご紹介していただいて、ディスカッションというような進め方にしたいと思えます。よろしいでしょうか。資料については、事前に配られていますので、説明はできるだけ簡潔にさせていただいて、議論の時間を取りたいと思えます。どうぞよろしくお願い致します。それでは、資料の説明をお願いします。

(渡邊計画推進課主幹)

計画推進課の渡邊です。よろしくお願い致します。座って説明させていただきます。私の方から、資料1から資料4につきまして、簡潔にご説明させていただきます。まず資料の1につきましては、前回の懇談会でいただきました主な意見について、道の対応への考え方を含めて整理したものでございます。いただいたご意見などにつきましては、ここに書いてある考え方、本日の懇談会で皆様と行わせていただきます意見交換の内容と合わせまして、先ほど局長の方から説明ありましたが、現在、取りまとめている原案にその内容を反映していくように検討しているところでございます。続きまして、資料2につきましては、対応方向の設定に関する一覧としまして、SDGsのゴールと国で定めている優先課題、ビジョンで検討している北海道の現状と課題、価値と強みなどの、北海道を取り巻く状況で掲載しているデータを整理しまして、ビジョンの優先課題として、5つ整理したものです。ここまで

は、前回も皆さんにお配りしていたものですが、事務局側で検討した優先課題ごとの対応方向も記載しています。対応方向につきまして、皆様からのご意見をいただければと思っております。各主体の皆様が対応方向に沿って取組を進めて行く上で、参考となるような「取組イメージ」というものを掲載したいと思っております。資料3が、その対応方向を記載していくイメージ、このような形で取りまとめていきたいというものになりますが、取組イメージについては、各主体が対応方向に沿って取組を進める上で参考となるようなイメージを主なものとして企業、団体・NPO、市町村の区分ごとに少なくとも原則1つずつくらいは記載していきたいと思っております。内容については、実際に取り組まれている先進的な事例を元に記載しますが、個別の企業名等は記載しない方向で考えています。できれば分かりやすくするために、イメージ画像も掲載していければと考えております。こうした取組について、皆様の方で参考となるような事例をお持ちでしたら、大変期限が短くて申し訳ないですが、8月29日までにご提供いただけますと大変参考になりますので、よろしく願いいたします。続きまして、資料4がネットワークの関係でございます。ネットワークの設立については、前回、RCEと共同ということでお話をさせていただいていましたが、道側の判断で、まずは一義的に道が責任を持って設立するというで考えまして、応募の期間もあったということがあり、既に募集を開始しています。皆様には事後の報告になってしまったことにつきまして、誠に申し訳ございませんでした。8月7日に設立について周知を開始しまして、今朝、確認できた段階で103の応募。大体、企業、団体、市町村がそれぞれが3割ずつくらいで参加のご連絡をいただいていたところでございます。特に団体・企業などは、全道的に活動されているところが多いので、札幌圏が多くなっていますが、それ以外は、全道まんべんなく入っていただいております。市町村もほとんどの振興局管内の市町村からご連絡いただいております。道側で用意しました資料の説明につきましては以上です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。大変簡潔に説明していただいたので、聞きたいことはたくさんあるかと思いますが、この後、皆様からの提言もお聞きした上で、広く意見交換をさせていただきたいと思いますが、今説明いただいた資料の中身について、よくわからないところ、意味の質問等がありましたら、お願いします。

(北海道中小企業家同友会・清水 誓幸)

ネットワークについてですが、募集をかける時に、どのような手段を使ったのかを教えてください。

(渡邊計画推進課主幹)

まずは当課のホームページの方で掲載しております。また、道の各部に、関係している団体や包括連携協定を締結している企業、または日頃から業務的にお付き合いのある団体等に連絡していただくようお願いしております。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

意見と質問が1つずつです。意見として、資料1で主な意見について対応をいただきましたが、時間のない中進めるには、9月上旬に示すであろう原案の案のようなものをこの場で示していただいた方が、議論がしやすいと思いました。我々の設置目的にもビジョンについてと書いていますので、第1回の意見の反映状況がわかるような原案の案をいただいた上で、今日、お話できるとよかったと思っています。質問については、資料1の3ページに、指標に関する道の対応の考え方がありますが、ここに記載されている①から③ということを経験で考えているということですか。文章からあまり読み取れず、どのようなことを具体的に考えているか教えてください。

(石川計画推進課長)

指標の関係については、道庁内で、①から③の基本的な考え方で既に整理させてもらっていますので、今回のビジョンもその考え方に沿って設定したいと考えているところです。①というのは、例えば、経済状況として暮らしの状況を表すものとして、「合計特殊出生率」といった生活に密接に関わるような数値がありますし、②の都道府県順位の関係でいくと、「健康寿命」だったと思いますが、47都道府県のどの順位にあるのかといった比較ができる指標。指標ですので、目標値を数値で設定しますが、毎年あるいは隔年で把握できるもの。そういった考え方で整理をしていきたいと考えております。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

今、総合計画などで使われている考え方ということですか。

(石川計画推進課長)

道庁全体の考え方です。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

今のことに関連していいですか。数値を設定されると仰いましたか。2030年にクリアする具体的な数値を設定されるということですか。

(石川計画推進課長)

前回、少しお話しさせていただいたと思いますが、今、優先課題が5つあり、それぞれに対応方向を記載していて、その対応方向ごとに現状値や2030年に向けて「こういう数値にしたい」というような目標値の設定をしたいと考えています。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

それは、各部局に照会されて、出して欲しいというようなことを言って、それぞれ出していただいたものですか。

(石川計画推進課長)

はい。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

大崎さんが言ったことの確認です。今回、原案が示されていないですが、ここで原案を検討する前に議会に出してしまうということですか。

(石川計画推進課長)

原案の策定に向けて、今、ご議論をいただいているところです。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

原案の策定に向けた意見は、原案の原案のような、原案がどうなっているのかが見えないと、空気に物を言っているような感じになる。

(石川計画推進課長)

仰ることもよく分かるのですが。原案を出して、また議論をしていただこうと、段階を踏みます。案に行く段階で。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

原案として出すための議論はないのですか。

(石川計画推進課長)

今、まさにそういう意識でやらせていただいています。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

原案として出すためには、道が考えた原案の案が検討されないと。原案が分からないので。前回、骨子案に対しては、かなり色々な意見が出されたと思いますが、資料1の意見についてというのを見ても、どう変えようとしているのか全然分からない。見ようによっては、ほとんど変えるつもりもないというふうにしかな読めないで、何に対して意見を言っているかわからない。

(石川計画推進課長)

我々の思いとしては、原案の策定に向けてご議論・ご意見をいただいていると捉えて開かせていただいております。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

第1回目で、骨子案に対して色々な意見が出されていましたが、その意見を踏まえて、どのように原案を考えているのかが示されていないので、どこに対して意見を言っているかわ

からない。

(石川計画推進課長)

例えば、資料2のように、原案に向けてこのように整理したいという考え方は、道庁内部で整理させていただいたものについては、資料をご提供させていただいているつもりです。ですので、骨子をお示しして、原案に進む過程の中で、今、ご議論をいただいて、それを我々がしっかり受け止めさせていただいて、原案の策定作業に反映していく、そういう段階。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

前回、私が一番始めに、この場はビジョンを作る主体なのか参考意見を言う場なのかを確認し、一緒に作る主体であると確認したと思います。そうであるならば、原案を外に出す前に原案の検討が必要だと思います。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

今の小泉さんのお話と同じことですが、原案を議会に提出する前に、原案を私達が確認して意見を言う機会というのはありますか。

(石川計画推進課長)

同時になります。「外に出る」という段階は、懇談会にお示しすること、道議会に報告すること、道民の皆さんに「こういう原案ですよ」とお示しすること、それは同じタイミングになります。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

そうすると、この場の意味がよく分らないです。

(石川計画推進課長)

道庁内部で原案を策定して、世間に公表するのは、懇談会の場であろうが道議会の場であろうが、道民に対して、我々の考え方を公表しますので、同じタイミングになります。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

一道民として今まで意見を言っていた訳ではないですよ。ビジョンを策定するために、ある程度集めていただいて、この場を開いていると思いますが、そうすると、タイミング、順番が納得しかねますよね。

(石川計画推進課長)

行き違いがありましたら申し訳ありませんが、懇談会の皆さんは、道民の専門の分野、専門の立場で参加していただいていますので、当然議論をいただいて、一緒にビジョンを作っ

ていくという意識の中で作業をさせていただいています。しかし、道民の代表の道議会に報告しますので、それは同じタイミングになります。ですので、どこかを優先的にお見せするのではなく、同じタイミングで公表させていただいて、それに対して意見をもらう。

(北海道NPOサポートセンター・定森 光)

今の説明ですと、一緒に作るというニュアンスとは少し違うという印象です。こちらは意見を言って、それに対してどのように書くのかについてはあくまで道庁がやり、やったものに対して、またこちらの意見を言います。一方通行のやりとりをやられようというスタンスに感じています。一緒に作るとなると、双方向でやりとりをしながら、例えば、私達があげた意見を道庁で何処をくみ取り、何処をくみ取らなかったということを示していただいて、どうしてそうなったかについてのやりとりがまたあり、出来上がったものが原案になるというようなイメージでいました。前回の1回目の意見に対して、どのように反映したのか、原案を見るまで分からないとなると、あくまで参考意見を言っているというふうに受け止めざるを得ないのではないかと思います。

(石川計画推進課長)

私の説明不足かもしれませんが、原案を出した段階では、当然いただいた意見については、どのように反映したのか、参考にさせていただいたのかということをお示しした上で、原案をベースにした考え方の状況を整理してご説明させていただき、最終案をどうするかという議論をしようと思っています。ですので、そのタイミングの問題だと思いますが、我々が一方的に作るのではなく、それぞれの代表の皆様からご意見をいただき、それを真摯に受け止めさせていただいて、それを原案にどういう考え方で盛り込んだのか、その考え方が駄目であれば、その次の段階で状況をご説明させていただいて、最終案になだれ込む。そういった作業スケジュールを考えています。一方的に我々が作るというふうに思われるのは、我々のご説明不足だと反省しています。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

先日、10月か11月にもう一度、懇談会を開くかもしれないと別の機会でお話をいただいていたのですが、議会に出すのがゴールではなく、議会でも議論して、その後にもこの懇談会で意見を言って反映していただける、そういったタイミングがあるということでしょうか。

(石川計画推進課長)

最後に皆様にご了解を取ろうかと思っておりましたが、今までの説明だと10月に開いて終わりとお話ししていたと思いますが、作業のスケジュール間もありますし、皆様から非常に活発なご意見もいただいておりますので、原案にどのように反映したのか、パブリックコメント(道民意見提出手続)や市町村・団体への意見照会を行いつつ、10月の中下旬くらいにもう一度開いて、最後のビジョンの最終案をどういうふうにしていけばいいのかをご議論を

いただこうと思っています。さらに案もできた段階で、もう一度開いて、最終案がこうになりましたので、今後、具体的にどのように推進していけばよいのかについてご意見をいただこうかなと。全体で4回になるイメージで思っているところです。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

確認ですが、道庁がお考えになっている予定としては、今日の後、既に原案を策定されつつあるとお話しいただきましたけれども、9月始めに原案を議会に提出されて、同時に広く公表される。そして我々にも、共有していただく。次の懇談会は10月中下旬に開くということですが、9月初旬から10月の第3回目までの間というのは、パブコメ（パブリックコメント）と市町村への意見照会、関係団体への意見照会が行われるということになりますか。

(石川計画推進課長)

はい。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

その結果を踏まえて、原案の修正版のようなものが、10月中下旬の第3回懇談会でご呈示いただけるということですか。

(石川計画推進課長)

10月の段階では、原案に対して色々なご意見がでていきますので、どういう方法で最終案に盛り込むかということまで書けるか微妙ですが、こういう対応を考えているというようなことを皆様にご説明させていただくことになるかと思えます。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

そこでどういう議論になるのか分かりませんが、色々な意見がでて、もう少し修正が必要になってくるということになると、その修正についてを第4回の懇談会の前にしていただくことになるのですか。

(石川計画推進課長)

第4回の際は「最終案がこうになりました」ということになると思います。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

第4回はパブコメが終わった後ですか。

(石川計画推進課長)

パブコメが終わり、我々の内部の整理をしています。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

もう完成の方ですね。

(石川計画推進課長)

完成のイメージです。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

完成バージョンに対して、どのような意見を言えばいいのですか。

(石川計画推進課長)

完成バージョンに対しての意見というよりは、「こうなりました」というご報告と、今後、このビジョンを使ってどういう取組をしていけばよいのかという、取組に向けて、皆様からご意見をいただこうかとイメージしています。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

第4回目の予定はまだ決まっていますか。

(石川計画推進課長)

まだ決まっていますが、作業のスケジュールもありますので。

(JICA北海道・野吾 奈穂子)

年内ですか。

(石川計画推進課長)

年内です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

細かいことで申し訳ないのですが、第4回の前にビジョンは出来て、公表されているという理解でいいですか。

(石川計画推進課長)

そうですね。最後の段階です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

そうすると、前回の意見やここでの議論を、最大限道庁の方で尊重していただいて、原案を作って、9月初旬に公表される。そこまでの原案の策定途中は、我々もこの会議が終わった後でも随時意見を言うことはできますよね。メール等で意見を言うことは可能であるにせよ、原案は出せない。9月初旬から10月中旬の第3回までの間は、別のオフィシャルなプ

ロセスとしてパブコメ、市町村意見照会等がなされる。それと平行して、我々も原案について、意見を言うことは可能ということでしょうか。

(石川計画推進課長)

はい。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ただ、こういう形で集まる場は今のところ設定されていないですね。

(石川計画推進課長)

はい。

(中小企業家同友会・清水 誓幸)

どうもじっくりしないところがありまして、ビジョンを作るということは、取組を考えながらビジョンを作らないと、動くビジョンになるということは考えづらい。自分が今まで生きてきた中で、色々な計画を推進してくる中で、ただビジョンを立てて動くということは上手くいっていません。計画を立てたり、取組の戦略を考えたりしながらでなければ、ビジョンをしっかりと描けないと思います。何かビジョンの言葉だけが先行しそうで、取組が本当に忘れられがちな気がしています。それが、4回目以降に行われると言われたら、「え？」というような感じがしました。

(JICA 北海道・野吾 奈穂子)

道庁のご意見を想像してのコメントですが、SDGsがそもそもバックキャストिंगなので、目指すべきイメージをみんなで共有して、それに向かってしゃにむに取り組んでいくという強い意志の現れなのかと逆に捉えました。

(中小企業家同友会・清水 誓幸)

そのように捉えられたらいいのですが、今起きている社会の問題や取り残されそうになっている方たちのことが実際に表にでていないこともたくさんある。本当に自分達も知らないことがたくさんあるわけですから、そこをどうするのということですよ。それは前回も言いましたが、前回もでてないし。そこを知らないで、何をするのか。輝くことだけするのか。「そうじゃないでしょ」と言いたい。

(JICA 北海道・野吾 奈穂子)

そういう意味では、資料1の13番に、「北海道で起きている問題点を明確化することをおまじやるべき。」とあるが、そのとおりだと思っていました。右側に道庁からの回答欄があり、今後整理していくということでしたが、前も申し上げたとおり、北海道の課題などは自分自身も弱いところがあるので、早めに教えていただきたいと思います。また、有坂

さんがまとめてくださった資料には、「北海道が持つ強みも大事だけれど、今まで手が行き届かなかったところにもしっかりとリーチしていくべき」と書いてあり、ごもつともだなと思って読んでいました。

(谷内計画推進担当局長)

先ほど、清水さんからもお話しありましたけれども、原案の中では具体的な取組がイメージできるようなものを盛り込んでいこうと思っております。この1、2週間で形にしていかなければいけないと思っています。先ほどお話しありました原案とスケジュールの関係につきましても、今、原案を取りまとめ中です。今日も色々な資料をいただき、これから説明していただけたらと思います。1回目の時、中々全部の議論を集約できていなかったかもしれませんが、この資料をいただきながら、この2、3週間ほどで原案の作成をもう少し詰めていきたいと思っています。そして9月上旬くらいに公表すると同時に皆様方にもお配りして、パブリックコメントなども進めて行きますが、その原案を基に10月中にまたお集まりいただいて、これまでのご意見などを原案にどのように反映したのかを説明しながら、もう一度議論をいただき、そして最終案に作り変えていくというようなスケジュールを考えております。ですので、もう一度原案に対して直接のご意見をいただく場を10月に開こうと思っています。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

おそらく清水さんが仰っているのは、具体的な取組というのをビジョンに書いていくのであれば、具体的な取組を行う人が策定にあたって関与していないと意味のあるものにならないのではということだと思います。それを1、2週間で書いてしまっているのかという問題提起だと思いますので、少し答えがずれているかと思いますが、それは少し置いときます。議論が大分、中身に移っていますので、野吾さんからも有坂さんの資料のお話もありましたので、皆様からご提言いただいている資料の方に移りたいと思います。配られている資料は大体ご覧になっていると思いますので、そこで書き切れなかったことや「これが意味するのはこのようなことだ」というようなことをそれぞれから簡潔にご紹介いただければありがたいと思います。その後、さらに議論を続けたいと思います。それでは、資料をずっとめくっていただきますと、RCE北海道道央圏協議会の有坂さんにご用意していただいた資料が2つありますので、ご説明いただいてもいいですか。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

では、簡潔に説明させていただきたいと思います。今、論点については大分出てきたと思いますので、ざっくりと説明させていただきたいと思います。まず、スケジュールについては、非常にタイトであるということはもう一度伝えておきたいと思っております。高橋知事も第2回定例会において、色々な主体の人たちに理解と参画が広がって、幅広い分野や地域で様々な取組が展開されると仰っている中で、それを実現して行くためには、透明性や多様な主体の参加など、今までずいぶん出てきていますが、この議論が欠かせないというふ

うに思います。そのためには、現行のスケジュールでは短いですし、この懇談会だけで意見を聞くという体制、もちろん資料の中ではこの懇談会だけではなく、パブコメなど別なところでも聞くとありますが、それで本当に聞いたと言えるのかという疑問が残ることが1点目です。それに関わって、ステークホルダーの分類と伺いますか、国連のSDGsの策定においては、ここに書かせていただいている9つのメジャーグループとその他のステークホルダーとして、計13グループが上げられています。非常にグループ自体が細かく定義されるようになってきている現状の中で、道庁の骨子案では、行政、企業、団体・NPO、教育機関、道民となっていますので、もう少し、特に配慮すべきグループというのを上げた方がいいのではないかとということです。第1回の時にも語られていましたが、北海道ならではの農業者や先住民族、あるいは行政ではなく自治体とした方が市町村は意識しやすいのではないかとということが一つと、日本政府の3つの柱の中でも科学コミュニティ、子ども・若者、女性というのが上げられていますから、この辺も入れた方がいいのではないかと考えております。次にめぐっていただきまして、SDGsの要素を反映するというようなことが何度も議会の中でも出てきていますし、日本政府の実施指針の中でも語られていますが、「SDGsの要素を反映」の「要素」とは一体何かというところで、SDGsはそもそもの「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されており、アジェンダを実現するために17の目標、SDGsがあるわけです。そこに書かれている「誰一人取り残さない」ことを誓うということや、「経済、社会、環境」の3側面を調和させるということが書かれています。また、日本政府の方でもその二つについては書かれていますので、きちんと「誰一人取り残さない」ということ、「経済、社会、環境の調和」ということは、北海道のビジョンの中にも入れるべきではないかと考えています。その次のページです。優先課題ということで、何を優先課題とするのかということですが、最も遅れているところに第1に手を伸ばすべく努力するということが2030アジェンダの中で言われています。先ほど、野吾さんにも指摘していただきましたが、強みを伸ばそうという今の骨子案ではなくて、取り残されている存在というものが一体どういったものなのかということ、道庁の視点だけではなく、実践者や専門家の方々が把握しているデータや実践というのがいくらかあると思いますので、これを是非活かしていただきたいと思います。その中から、本当に取り残されている存在というのは誰で、その存在に対して、どのような取組が必要なのかということを考えるべきではないかと思っています。例えば、北海道では、アイヌ民族や旧産炭地、過疎、貧困、ジェンダー、生態系、再生可能エネルギーの問題があるかと思います。この優先課題に取り組むためには、モニタリングであるとか、進捗状況、評価というのが欠かせないと思います。そのモニタリングや評価をしていくにあたっては、透明性と説明責任というところが重要になってくるかと思いますが、それを道庁だけでやるのではなく、専門性のある多様な視点によって行われる体制を作っていくべきではないかと思っています。その辺りは、2030アジェンダや政府の実施指針でも上げられているところだと思いますので、道庁においても重視していただければと思います。それに関連して、推進手法です。できれば、ビジョンだけではなく、「北海道SDGs達成行動計画」というような行動計画を立てていただきたいと考えます。骨子案の中には、道の主な取組状況に、政策評価を活用して整

理すると書かれていますが、先ほども申し上げましたとおり、ステークホルダーの参画を得て、きちんと共同によってモニタリングや評価を行う体制を作っていたいただきたいと考えています。骨子案には「ステークホルダーが連携」と書いてありますが、連携とは何を指すのかということ具体的に表示していただきたいと思います。例えば、定期的なステークホルダーの意見交換の場を年何回開催するといったことや政策協働していくというようなことをしっかり文言として書いていただきたいと思います。また、やはりSDGsを進めていくためには、自治体が欠かせないと思っておりますので、市町村への支援の体制をきちんとやっていくということを是非書いていただきたいと思います。「世界の中で輝きつづける北海道」ということで、世界と出ていますので、北海道が世界に対してどのような貢献ができるのか、どうやって世界に対して輝いていくのかということを表示、明らかにするためにも、北海道内のことだけではなく、その辺りも書いていただけるといいかと思っております。こういったSDGsの達成に向けた取組を進めるためには、政策協働というものが欠かせないと思っております、これは道庁とでなければできないことだと思っております。政策協働についても何度かこの場でも出ていますが、立案から一緒に作っていくというところなんです。文章も一緒に考えさせていただきたいという思いをもって、実現していくための方法であるとか、モニタリング・評価なども一緒にやらせていただきたいというふうに思っております。その上で2030アジェンダが掲げている、地球と人間の繁栄と平和のためにパートナーシップで実現していくということが、初めてできるのではないかと考えています。以上です。これが提案の方ですが、もう一つは、RCEの活動の内容を説明させていただいておりますので、後ほどご確認いただければと思います。ありがとうございます。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。このご提案はRCE北海道道央圏協議会に加盟されている51の団体の総意といいますか、ある程度の意見を踏まえて提示されたと考えてよろしいでしょうか。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

総意ではないのですが、一応、「このようなことでどうですか」ということを意見照会し、また、意見交換の場も設定し、集まっていたいて意見出しをした結果をまとめたものですので、そのような位置付けとして考えていただければなと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。議論は後でまとめてということで、続いて、今日配られた資料に行きます。大崎さんお願いします。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

なぜSDGsのビジョンなのかということをもう一度書かせていただきました。基本的には北海道総合計画と同じ内容であれば必要性がなくなるので、先ほど有坂さんが仰ってい

たようなSDGsの要素を取り入れることをやっていく必要が絶対あると思っています。総合計画と同じであれば作る必要はないと思います。またSDGsの中で変革ということが一番大きく言われていると思いますが、道庁から変革を実践していく必要があるのではないかと考えています。それを踏まえて、4つ程提案を書かせていただきました。一番目は、骨子案のビジョンの推進管理についてです。これについては、指標の設定と進捗管理をしっかり行うこととしています。ビジョンということで何かしらの目指す姿というのを表して、「それに向かってこういうことをやります」や「こういう課題があるので目指す姿を作ってこういうことをやっていきます」ということがあるかと思いますが、具体的な指標はまだない状況だと思います。先ほど、何かしらの形で設定するというお話だったと思いますが、既存の指標がいいのか、あるいはSDGsということを標榜するのであれば、それに合わせた新しい指標を作ることも考える必要があると思っています。その場合、我々というよりは指標に関する専門家の方のご意見をしっかり聞く、そういう場をしっかりと設けて共同で作成すべきではないかと考えています。指標については、今年度中というよりは、少し遅れてもいいので、ビジョンができた後でも、しっかり時間をかけて作ってはいかがかと思っています。SDGsの指標についても、SDGsの策定は2015年ですが、その1年後にSDGsの指標が策定されました。ですので、そこはしっかり時間をかけたらいかがかと思っています。また、今回の懇談会の中でも色々な方から意見を聞く場が必要という意見がありますが、道の政策を理解していただく機会にもなりますし、政策を進める上で人々に担い手になっていただける可能性もあります。行政だけではなく、情報を補完する機能というのを持っています。この間に何か意見を聞くということは難しいですが、ビジョン策定後でも、道としてビジョンを作ったということを179市町村と一緒に、地域説明会をどんどん開いていただきたいと考えております。裏面に参考で、EPO北海道でパブリックコメントワークショップについて、札幌市の環境基本計画策定の時のものを載せています。パブリックコメントという機会が一応ありますが、パブリックコメントが実はあまり知られていないということもあります。その機会を活用するために、行政の担当者の方から、計画についてお話いただいて、ざっくばらんに計画についてわからないことや意見などを、写真では見づらいですが、付箋にメモしたりしながらお話しするといったワークショップをやっています。こういうことをやらせていただくと計画に対する理解が深まったというアンケート結果も出ていたりしますので、計画についてお話を理解する場というのは必要なかと思えますし、今回もパブリックコメントがあるので、そういう場をEPOとして作れないかと少し思っています。次に、ガイドラインの定義ということで、ビジョンでありガイドライン、道民が課題解決の行動をするためのガイドラインと言っていますが、道の政策にSDGsの考え方を入れていくような、政策のためのガイドラインといった位置付けにもして欲しいと思っています。例えば、道でSDGsの項目を政策ごとに整理していると思うのですが、同じゴールになるものは一緒にできないか、「皆さん、ビジョンを実現するための政策を変えていきましょうよ」と、そういった同時解決できないかといった連携はどうかと思います。3番と4番に関しては、骨子案の項目を削除してはいかがかという提案です。3番については、資料2と資料3で出している、取組の対応の方向性についてです。これを構成員で埋めることは難しいの

ではないかと思ひます。意見が漏れたりするのではないかと思ひ、私としては非常に危惧しているのです、ここであえて示す必要がないのではないかと思ひます。その代わり、SDGsと自分自身がどのように関連していたりするのか、興味あるSDGsに対して、北海道ではどんな課題があり、もっと知りたければ、関係する団体をご紹介するような場にしたらいかかかというものです。4番についても、骨子案にステークホルダーの取組が各行政とか書いていましたが、それは道庁として期待することであって、その人たちが実際どう思うのかというのはいわからないので、消してしまいいいのではないかと思ひます。以上です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。続いて、小泉さんお願いします。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

私からは、提案のようなものが2つ、参考資料を1つ出させていただきました。1つは前回の道提出のビジョンの策定及び骨子案に対する意見ということで、内容はほとんど有坂さんが言ったことと被り、また、前回、私が言ったことや皆様から出されたことを文字にしたというだけのことです。1つ目のビジョン策定の前提としてということは前回も言いましたが、言ったことに対するフィードバックがないので、言い続けるしかないということで、ビジョンを多様なステークホルダーと共有するビジョンとするのであれば、先ほども出ていたように、多様なステークホルダーが策定のプロセスに関与しなければならないというのは、何というか数学的な命題みたいなものだと思ひています。ですので、互いに共有するビジョンを道庁が策定できると考えるのは傲慢だと思ひます。ビジョンを作るのであれば、ちゃんとそれができるようなスケジュールでやって欲しいということを改めて書いてあります。もちろん、道は広域の自治体なので、道内市町村からの意見反映ということも当然必要だと思ひます。次に、いつくかは原案を考えていらっしゃる段階で答えていただけると思ひますが、もう一つ前回言ったことで、推進ビジョンという名称が整合性がとれていないので変えて欲しいです。また、ビジョンの性格について、先ほど野吾さんがバックキャストिंगと言っていました、前回、道の方が言っていたと思ひますが、今回のビジョンをバックキャストिंगで作っていないということを明言されていたと思ひるので、バックキャストिंगになっていないですね。既存の計画をベースにしている。国連が採用したSDGsをあえてやっいてこうということなので、考え方にしろ、策定のプロセスにしろ、基本的に国連が採択した2030アジェンダというのをベースにすることが当然基本だと思ひます。そこを改めて、考え直していただきたいということです。2つ目の骨子案について、手がかりが前回出された骨子案しかないので、一応その項目に沿って書いていますが、書いてあることはほとんど有坂さんから出たことと被っているかと思ひますので、1番は省略します。2番で「北海道を取り巻く状況」ということで、北海道の現状と課題を書いていくという話でしたが、私の提案として、現状と課題だけではなく、歴史的背景をきちんと踏まえた課題・分析をして欲しいということ。これは後ほどの提案にも関わります。これも色々な方から出たことですが、世界に誇れる価値と強みというものは、別のところでアピールしてもらおうの

はいいと思いますが、SDGsとあまり関係ないので、いらないと思います。基本的にはやはり「誰一人取り残さない」、課題を解決するというのがSDGs達成のポイントなので、世界にアピールする点をここで書く必要はないと思います。これもどこまで反映されるのか、空気に向かって言っているような話ですが、次に、「めざす姿」の「世界の中で輝きつづける北海道」は、アジェンダの理念から少し外れすぎなので変えて欲しいということです。私の提案は、キャッチコピー的に言うなら「誰ひとり取り残さない北海道」でいいと思います。参考資料に、ビジョンのもう少し細かい中身として、事前に懇談会のメンバーの方には投げていましたが、アジェンダに書いてある「私達のビジョン」のところの「世界」を「北海道」に全部変えたものです。今年策定するビジョンというのは、多様なステークホルダーの意見を反映していないので、更新型でこれからやっていきますということを前提として、そうであれば国連のビジョンをベースにするのが一番いいのではないかと思います。人によって違うと思いますが、これが出されると私は結構ワクワクします。優先課題については、少々既定路線になっている感じですが、少なくとも前回の懇談会で出された意見として、優先課題の区分の仕方をもっと少し考え直してはどうかという意見も出ましたし、そもそも優先課題いらないのではないかと意見も出されていたと思います。そこは少し変えることを考えてはどうかということです。一応、代替案としては、2つ程あげております。前回から言っている割と大きなポイントは、持続可能な開発を巡る議論をするときのステークホルダーの考え方ということで、国連のメジャーグループのような形を考えて欲しいということです。これはとても大きなことだと思っています。SDGsの際にいきなり出てきたメジャーグループではなく、それこそリオサミットの際の、アジェンダ21の中でそもそも規定されている9つのメジャーグループです。歴史的経緯もあるわけですから、ここもきちんと反映させるようにして欲しい。当然、ビジョンができた後のモニタリングなどにも多様なステークホルダーが絡むようにして欲しいということです。それともう一つ、これは菅原さんの提案を見て、出しておいた方がいいと思い、出したものですが、アイヌ民族の参画とその意見のビジョンへの反映の明記の必要性ということです。あまり詳しくは説明しませんが、ビジョンの骨子案にもネットワークにも、「北海道命名150年を節目に」という文言が出てきていますし、説明の中でも何度か触れられていたと思いますが、この「節目」の意味がよく分からない。ただの節目なのか、もうちょっと深く考えようという姿勢なのかということで、個人的にはとても重要な節目だと思っています。まさにこれまでの150年、北海道が近代国家としての日本に組み込まれてからの150年の「開発」の歴史をきちんと反省的に振り返るという意味での大きな節目にする必要があるかと思います。書いてあるとおりですが、重要なことは、国連の持続可能な開発を巡る議論の中でも、先住民族がメジャーグループの一つとして位置付けられていますし、持続可能な開発という概念自体、先住民族の貢献なしには考えられない概念だと思っています。ですので、北海道でSDGsのビジョンを作る限りは、先住民族であるアイヌ民族の参画とその意見の反映ということがなければ、仮に世界的に発信した際に、「何じゃこれ」と思われると思います。これはおそらく国内の目以上に、世界はそのように北海道を見ていると思います。正直、懇談会にアイヌ民族のメンバーがいないということ自体がとても残念なことです。やはりこのプロセスの中

に、きちんとアイヌ民族の参画というのを位置付けて欲しいということです。以上です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。では、続いて、清水さんお願いします。

(中小企業家同友会・清水 誓幸)

私からの意見として、A4一枚で書かせていただきました。私は中小企業家同友会としての名前而来ておりますが、同友会の中でこうしたことを審議したとか議論・意見をいただいた訳ではありません。同友会の名前でRCEに参加したりESD支援センターに参加したりしている中で、自分が常に感じていること、そして今回の道庁のビジョンに対して思ったことですので、私個人の意見と思っていただければと思います。自分たち企業や事業をやっている経済界の人たちが、どのように関わっていくのかということイメージして提案を出しました。その中で、一つ目としては、解決すべき課題の根底原因というものを探るということが一番優先する必要があるのではないかとということです。やはり知らないことがあまりに多すぎるように思います。つい最近お会いした、働きづらい方を支援している事業をやられている方から聞いたことですが、障がい者手帳を持っている人たちだけが働きづらい方ではなく、一度勤めたけれども仕事というもののイメージが付かず、挫折し、怯んでしまって仕事を辞め、そのまま引きこもりになってしまった方、別に障がいがある訳でも何でもありません、そういう方たちも働きづらい環境になっている。このことは、この方たちだけでなく社会に問題もあると思う。そういう支援をしている人たちと話をしていると、どういうところに問題があるかということ、企業の事業としての価値や事業としてのあり方など、社会人になる過程の中で、子どもの時から示していない、どの仕事かどのような付加価値や利益を生んで賃金に跳ね返ってくるのか、そういった仕組みなどが説明されていないので、自分の仕事の中での価値が分からないということも、話し合っただけで知ったことでした。企業はもっと自分たちの仕事というものを知らせていくべきだと感じたところです。そういうことで、根底原因というのはまだまだ違うところがあると、色々な人に会うことで知るので、根底原因を探ることが優先課題として重要なことではないかと思えます。二番目については、皆様とだいぶ被っているかと思えますが、ビジョンを動かすためのものではなく、達成するまでの行動計画をつくり、そして常に見直していくということが必要だと思えます。三番目に挙げたのは、ビジョン達成に対する「責任」ということで、これは僕ら企業や経済界に対して責任という意味合いのものがあるべきではないか。というのも、今、現実として、社会的に市民や道民から選ばれているものが本当に未来から見た目線で正しいものが選ばれているのだろうか。企業が作ったものが、これは本当に未来から見たときに、環境面や健康面などで、正しいものが選ばれているのだろうか。そういう目線で考えたときに、やはりこれは考え直すべきだろうということ、誰が示すのか、そういうこともやはり覚悟しなければいけない、そういうことをしっかり示さなければならない、誰が示すのか、ということも色々なところで議論した上で、例えばリサイクルをするのであればリサイクルにしっかりとせるインフラを作るべきだと思うし、そこにのせるまでの間にゴミをポイ捨てする人をどうするの

か、そういう人をどうなくしていくのか、という問題でもあります。ずっとつながっていく問題だ、常に従っていくものだと思うので、そうしたことを掘り下げて、そして責任の有る色々なセクターの人達に責任というものがはっきり、何か公的にという責任とかではなく、この方達にとってこういうものが責任ある、ということを明確にすることが、重要ではないか。そういう責任の中で変革を起こしていく、変革を起こすべき点を明確化するということを提案させてもらいました。こういうことに対する、最終的には決意ということがあると思います。出してしまうと、今まで選ばれてきた人が選ばれなくなる、こういうことをやられると困るといった人も居るかもしれません。しかし、それが今までの、企業の経済活動によって起こした環境破壊でもあると思うので、今すぐできることではないが、変革をしっかり意識するということが重要ではないかと思ひ、この三つの提案を出させて頂きました。以上です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。最後の話は大崎さんが仰っていたSDGsを如何に自分のものとして考えていくのかということをしっかり議論していかなければならないということと関係してくるのかと思ひました。続いて菅原さんお願いします。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

全体のことについては皆様から詳しく説明していただいておりますので、私は自分の専門分野から一点だけ提案させていただきたいと思ひます。SDGs実現に向けた推進体制について、すべてのゴールやターゲット、それからビジョンの策定作業や指標、モニタリングといったあらゆるフェーズにおいて、ジェンダーの視点を取り入れるという言葉を入れていただきたいと思ひております。今回の懇談会は私も勉強しながら参加させていただいているところで、初めはゴール5にジェンダー平等という課題と目標があるというくらいに思ひていましたが、アジェンダを広く見ていると、ジェンダー平等は一つの課題と言うよりは全てに通底する見方、視点であると改めて気づくきっかけをいただきました。独立した目標としてゴール5にジェンダー平等が掲げられているほか、前文・宣言にもジェンダー平等や女性、女児という言葉が何度も強調されています。また、ゴール5以外のゴールにおいてもジェンダーのことは言及されていまして、調べたところ、全ターゲットの34%、指標の32%をジェンダー指標が占めるということがありました。ですので、ジェンダー平等というのは一つの目標ではなく全ての目標とターゲットに影響を与えるようなクロスカッティング、分野横断的な問題であると改めて感じました。そのような意味では、全てのゴールやターゲットにジェンダーの視点を取り入れるということに記載していただきたいと思ひております。また、あらゆるフェーズにも入れていただきたいというところは、先ほどからモニタリングの話や指標の話も何度か出ていますと思ひますが、ジェンダーの視点をどのように入れていくかというところがすごく重要だと思ひております。指標や統計の話となると、数字を取ること、取っている数字から数字を見せることの二段階があると思ひます。数字を取るところは、先ほどご説明いただいたとおり、北海道のルールがあると思ひますし、国連や国などでも、ジ

エンダー統計についてはジェンダー統計のミニマムセット、最低限これを取りましようかと推奨しているものがあると思いますが、それを超えて取るのはなかなか難しいということかと思えます。一方で、既に男女別の数字があるものに関して、きちんと男女別の統計を見せるということは、今ある数字でできることかと思えます。ですので、今まで出していないものもあるかもしれませんが、そこは今後出していくというチャレンジを是非していただきたいと思っています。重ねてになりますが、メジャーグループとしての女、取り残されやすい存在としての女性といった意味合いと、もうひとつ、ジェンダーの視点という二重の意味で、ジェンダーの視点、ジェンダー平等という言葉、是非入れていただきたいと思えます。しかし、この骨子を見て、どこに入れたらいいかと考えたときに、入れづらいなと思えます。先ほどの小泉さんの話とも共通しますが、国連のアジェンダの前文などを見ると、価値観や理念などのような、少しワクワクするような記載というのがあると思うのですが、そういったものがこの原案の中に入ってくるといいなと思えます。そうすれば、ジェンダー視点もそうですし、それ以外の誰も取り残されないという想いやパートナーシップといった、いくつもキーワードが既に出ていると思うので、そこを入れて、ここで大事にしたい価値観みたいなもの、少しワクワクする文章を入れることを是非提案したいと思えます。以上です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

メジャーグループとしての女性、というのは先ほども出ていましたが、それに加え、まずジェンダーというクロスカッティングな視点をしっかりと理念的なところに取り込んで欲しいというお話でした。ありがとうございました。

では、今回、紙で提言、提案、あるいはご意見をいただかなかった方からも、前回言い足りなかったことや前回の議論を聞いて、考えてきたということなどがあれば、聞かせていただければと思います。どなたからでもいいですが、アイウエオ順でお願いしたいと思います。

(Ambitious Farm・柏村 章夫)

前回から二回目ということで、私が率直に感じたことを言うと、普段からSDGsに深く関わっていないといえますか、考えていない、一農家として農業経営をしまして、自分の事業を通じてSDGsに興味を持ち、今、取組を始めているような、素人目線でこの会に参加させていただいています。そもそも今までの話で言えば専門家の意見を聞く場のようになっていますが、私は場違いかなと少し感じながらも、必死について行っているつもりなんです、どうもこのビジョンに対して、先ほどから色々なステークホルダーの意見を取り入れてやるべきという意見がある中で、専門的な意見を聞く場なので仕方ないのかもしれませんが、やっぱり少し取っつきにくいといえますか、中々分かりにくいなと感じるところです。ステークホルダー、利害関係者などは、言葉としては分かりますが、それをどう具体的に捉えるかというところを、ビジョンの中で一般の人にも分かるような形で表現された方がいいのではないかと感じました。あまりまとまっていますが、自分事にどう捉えるかというところで、僕はこの協議会苦手だなと正直思っています。一方通行なやりとりで、先ほど小泉さんが「空気に対して話すようだ」と仰っていましたが、協議会に対し、もっとやりとりの中で作られ

ていくものではないかという僕の認識があります。意見を出す側もですが、道庁に対して、「足りてない」や「こうしよう」というスタンスが、僕は少し苦手を感じています。少し幼稚な言い方をすれば仲良くやれないものか、この会に向かう足が重くなるような会ではなく、ワクワクではないですが、せっかく未来に向かって意味のある会議をしていると思うので、お互いに作り上げていくような感じをもっと出せたらいいなと感じています。以上です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。足が重くなっているとは知りませんでした。すいません。ありがとうございます。是非、場違いと思わず、どんどん言っていただければと思います。今のご意見もすごく参考になるご意見だと思いますので、どんどん発言して頂ければと思います。

(北海道NPOサポートセンター・定森 光)

皆様の発言を聞いておりました、少し一方通行なやりとりになってしまっていて、私も対行政に対して話しをしているというふうになっていたということで少し反省したところです。一緒に作っていくというところは重要だと凄く思いますし、そのプロセスを、色々な人達と一緒に経ていくということが大事だと思いました。前回も言われていたかと思いますが、個人的にこのビジョンが誰のためのもので、誰に向けたものかということが見えづらいところがあり、最終責任は道庁が取るところが姿勢として伝わってきますが、やはり一緒に作る私たちも、色々なステークホルダーもまた責任の主体だと思います。そういったところがこのビジョンから見えてこないといけないのかなと思いました。指標についても、道庁の各部署が挙げたものというのは、道庁ができる範囲内のもので止まってしまうと思います。そうではなく、色々なステークホルダーが感じている、今まだ見ぬ課題というものを浮き彫りにしていくということも重要だと思います。それをどのように解決するかということは、今すぐ答えがなくても、それもまた一緒に考えて作っていく、政策協働ということがありましたけれども、そういったことをやっていくという姿勢を見せることがビジョンでは重要だと思いました。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。

(コープさっぽろ・鈴木 昭徳)

私は皆様とスタンスが違いまして、この会議自体が制作委員会などではなく、あくまでも懇談会ということですので、道庁がどういうことを考えているかを理解すること、また一方で、私はコープさっぽろで実際にSDGsを作っていく立場として、どいうった方向性で作ればいいのかなど、情報収集も兼ねて参加しておりますので、そういう意味では本当に勉強になるなと感じているところです。私は作り手でもあるので、そういった立場からすると、皆様からの意見にありましたけれども、細かく色々なところを網羅しようとする、逆に落とし込みづらいのかというところ、雑な言い方をしてしまいますと、「SDGs やりますよ」と言うだ

けでも世の中は変わるかなと個人的に思います。今、我々のお店や色々な場所に SDGs のポスターが貼ってありますが、店長さんなども「これは何なんだろう」といったレベルです。情報だけが先にいってしまっていて、中身を理解していないというのが現実だと思います。ですので、一番大事なことは、個別の課題それぞれに数字を詰めてアクションプランを進めていくことは大事なことです、そもそもライフスタイルを変えなければいけないということ、そのための SDGs であるということ、まず「0」から「1」にするところに行けばいいのかなと思います。皆様の議論はどちらかというと、「8」を「9」、「9」から「10」にするような感じがして、まだまだ世の中はそのレベルに到達していないのではないかとというのが内部の職員や組合員さんに説明する立場として、率直にそのように思いました。以上です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。それでは。

(JICA 北海道・野吾 奈穂子)

先ほども引用させていただいた有坂さんの力作がありましたが、最も遅れているところの対処が優先課題であるという点について、一市民としてのコメントと組織の人間としてのコメントが混じってしまったので、改めて言及させていただきたいと思います。最も遅れているところへの対処が喫緊の課題だということは、私も市民として賛成しています。しかし、ここでは「強みを伸ばすよりも」といった書かれ方をされていますが、私の中ではどちらも大切ではないかと思っています。JICA が推進する国際協力は、国内のリソースパーソンにご協力いただきながら進める途上国の開発支援です。北海道が持っている価値や強みで国際協力に貢献できる場所はたくさんあり、これまでの実績もたくさんあります。しかし、日本全国を見渡してみても、日本の進める国際貢献は世界の中でまだまだ弱いと感ずることがあります。ですので、小泉さんには申し訳ないのですが、世界に誇れる価値と強みを削除してはどうかというお話には少し反対で、逆にこれを残していただくことで、道庁だけではなく、各市町村もこれを根拠にして国際協力に取り組みやすくなるのではないかと感じています。実際、途上国から来日する JICA の研修員も、農業や観光といった北海道が強みを持っている分野を学びに来ているのですが、途上国の研修員が学ぶだけではなく、その研修の場でのディスカッションを通じて、日本の各地域の方々が逆に途上国の研修員から学ぶということもたくさんあります。お互い相互に学び合って両方が発展してくというのが、手前味噌ですが JICA 事業の良い部分だと思いますので、北海道が誇る価値や強みは残していただければと思います。以上です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。一通りご意見をいただきましたが、言い足りなかったことや言いそびれたことなどあればお願いします。

(JICA 北海道・野吾 奈穂子)

有坂さんから提供の参考資料の 17 ページに載っている話、RCE の考える 100 年後の話もいい、いっそのこと、これがビジョンでもいいのではと思いました。以上です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。今、皆様の意見を言っていたいて、野吾さんからは他の方の意見に対するご意見も出ましたけれども、今までの言われたことなどに対して、少し考えが違うといったことやサポートするといったことなど、何かあればお願いします。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

原案が分からないので、応えられる範囲で現在どのように考えているのか、応えて欲しいのですが、私の提案の中で、そもそも名称はどうするのか、「めざす姿」は「世界の中で輝きつづける北海道」のままなのか、ここでの意見を反映させるのかなど、現時点で原案をどういうふうに考えているのかを教えて欲しい。でなければ、先ほどから分からない中で言っているという状態が解決されません。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

前回の我々からの意見については、資料 1 に項目立てしてまとめていただいて、それに対して道の対応の考え方が一応書かれてありますが、どれも「していくことを検討していきます」や、「幅広く検討していきます」と、分かりにくいといえますか、議会に対してはこういうことだろうという感じがしています。我々が実際に見たいのは、この意見が原案にどう反映されつつあるのか、もし原案を見せてもらえないということであれば、どういう作業が行われているのか、困っていることがあるのか、担当として書き込みたいけど書き込めないなど、そういうことをもっと知りたいと個人的に非常に思います。どれも「考えていきます」などが書いてある。今日、午前中に Facebook を見ていると、誰かが虚構新聞の記事をシェアしてまして、虚構ですが、ビッグデータを使って、役所が使っている言葉が実際にどれくらい実現しているのかを調べてみたという記事がありました。「前向きに検討します」や「善処します」と応えていただいているものが、実際の施策に結びついているのかを調べたところ、結びついていたものが 0% だったという記事が虚構新聞にあり、面白いと思って読んでいました。それが頭にある中で、これを読んでいました。すいません、失礼なことをいいました。分かる範囲で結構ですが、資料 1 で紙に書けなかったけれども、今考えていることなど、差し支えない範囲で応えていただけると、少し我々の議論もイメージが進むかと思えます。

(石川計画推進課長)

本当に今、悩んでいる最中だというのが正直なところ。一つ明確にお伝えできるのは、いい話ではないですが、策定スケジュールは拙速だと言われてはいますが、我々としては 2015 年に SDGs が提唱されて、今年度、北海道命名 150 年という節目で、そこで SDGs の取組をやりたいという思いで始めているので、この策定スケジュールを変えずに、北海道の全体のなかで、SDGs の取組を広げていきたいという思いで作業をしているものですから、年内に

ビジョンを作りたいというところは変えられない状況です。ただいまご指摘いただいたような名称の話や「めざす姿」の話というのは、前回からもご意見をいただいておりますので、それをどういうふうにするのか、あるいは変えないのであれば、例えば注釈をいれるとか、そこを今、ギリギリ検討している最中です。

(谷内計画推進担当局長)

若干補足しますと、もともとこのビジョンがどういうものかということ、ご存じかと思いますが、広告代理店がSDGsの認知度を調査したときに2割くらいの人にしか認知されていない、札幌市もこの前に調査されていますけれども、知らない人がかなり多く占めているという状況の中で、先ほどお話しありましたけれども、あまり日常的にSDGsというものを意識されていない方が大半な中で、「SDGsやっこうよ」、「進めていこうよ」ということを分かりやすくお示ししていければいいというのがビジョンの取っかかりでもあります。そこに何を盛り込んでいくかということ、ただ「SDGsがんばりましょう」ということだと、二枚くらいのもになってしまうのでそうもいかない。ただ、色々な人々が日常の行動の中で、普段の生活の中で、「これがSDGsに関わっていて、繋がっているんだ」と意識できるように、具体的な取組イメージが分かるように、という意味で基本的な指針であり、ガイドラインという意味合いを持たせようかと思っております。できるだけ分かりやすいもの、使いやすいものにと考えていて、これが出来上がった暁には我々も出前講座のようなもので、色々なところに行ってお話ができるようなものにしたいと思っております。そういった意味で言うと、ご意見ありましたように、例えば、二、三年かけてじっくりやっていく、いろんなことを書き込んで素晴らしいビジョンにしていくといった、時間をかける方法もあるのかと思っておりますが、やはり一方で、まだまだ道内でSDGsが知られていないという中で、できるだけ速やかに作ってSDGsを広めていきたいということが想いとしてあります。そうした意味でいくと、ビジョンの名称も、SDGsビジョンがいいのか、達成ビジョンがいいのかということ、我々としては今のところSDGsを進めていこうという意味で、SDGs推進ビジョンというのが分かりやすいと個人的には思っています。「めざす姿」も、いろんなご意見があると思います。今日もご意見いただきましたけれども、SDGsが世界共通の言葉ということであれば、北海道として何に貢献して共通の目標に向かっていくということでは、やはり世界というキャッチフレーズは何らかの形で入れ込んだ方がいい、しかし、その中に「めざす姿」で今日もご意見がありましたように、「誰一人取り残さない」や「環境・経済・社会の統合」などを「めざす姿」かどこかに、どういう形で入れ込んでいくことができるかということを現在考えているところ。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

今の話、これまでの話を聞くと、北海道としてやりたいことはSDGsの取組を広めていく、そのためだとしたら、ビジョンという名前自体が変ではないですか。推進であれば推進プランとか。ビジョンというのは将来像。「こういう北海道にしよう」という将来像を決めて、そこからバックキャストで作っていくのがSDGs的なスタンスですよ。SDGs

を推進していこうというのはまた別の話ではないですか。それなら「めざす姿」いらな  
い  
すよね。

(谷内計画推進担当局長)

「めざす姿」があって、それに向かってどのような課題があり、どういう対応をしていくのかということをお示ししていかないと、皆様が取り組むに当たって何に向かってSDGsに取り組むのか、SDGsとはこういうものだということに、ただSDGsの言葉を紹介するだけでは、SDGsが進まないという気がします。SDGsを進めて行くにはこのような方向があって、こうしたものに向かって行きませんかということをお示することも、SDGsの取組を広めていく上で意味があるのではないかと考えています。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

話が二つあり混同している感じがしています。分かりやすく伝えるということと本質は何かということ、ビジョンということと推進していくことは違うもので、分かりやすく伝えることは本当に重要だと思いますし、そこはやり方の問題だと思っています。そこを話すと、理念的なビジョンと混同してしまい、「分かりやすく伝えなければいけない」がビジョンになってしまう。それを分けて考えていないので、ずっと議論が平行している感じがします。分けた方がよい。私たちは難しいことを伝えて欲しいと言っている訳ではなく、SDGsの理念に沿った形でやっていただきたいと言っているだけです。SDGsのメジャーグループとは何かといったことを伝えて欲しいということではなく、大切な、「誰一人取り残さない」といったことをちゃんとビジョンに載せていただきたい。それを分かりやすく伝えるのは、プランであったり推進計画であったりするのではないかなと思います。それが混同しているから変な感じになっている気がする。この骨子案を見ると、一緒になっているから議論が難しくなっている感じがしていますので、分けられないのかなという感じがします。

(石川計画推進課長)

我々はビジョンの中で、分かりやすく伝えるものと理解していただいて具体的な行動に繋げようとするものをビジョンと呼んでいる。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

その位置付けが分からない感じになっています。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

食い違っているというのを今の説明を聞いても思いました。

(谷内計画推進担当局長)

前回の説明でも申し上げましたが、基本的な指針、どういうふうにSDGsを進めていくのかということ、また、誰もが取り組めるようなガイドラインという二つの位置付けをビジ

ョンに持たせようと思っていますので、有坂さんが仰っているとおり、二面性がその中に入っているということはあるかと思っています。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

ビジョンというのは小泉さんが参考で出してくれたようなものをビジョンとしてイメージしてしまうものですから、そこをきれいに分けていただいた方が議論しやすいと思います。

(北海道NPOサポートセンター・定森 光)

今話しているのは、推進のためのビジョン、推進をどうするかという話をしているので、達成のためのビジョンはまた別にやるなど、何か分けた方がよい。混同しているように感じる。推進のためということであれば、推進のためにやり、達成のために別でやるのであれば、それを推進プロセスの中に明記した方がよい。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

達成のためにというところは、何人かからご意見のあった行動計画や、それぞれの主体が責任をもって何ができるのか、何をすべきなのかということを書き込んでいく必要がある、という意味合いのことでいいですか。

(北海道NPOサポートセンター・定森 光)

そうです。優先課題というのは鈴木さんも言われましたが、あまり明記しなくてもいいのではないかと思います。それは達成計画のなかで、色々なステークホルダーとともに作り上げていくとするぐらいでいいのでは。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

切羽詰まって「多様なステークホルダーの意見を」と言っているのはビジョンだから言っています。達成するための将来の北海道の姿を、多様なステークホルダーで共有するためのビジョンであれば、多様なステークホルダーと一緒に作らなければならないということ。推進方法などは、それと少し違う話。逆に言えば今回、時間のない中でやるのは、どういうふうにこれから推進していくのか、どのように多様な主体を巻き込んでいくのかというようなプランを出すというイメージであれば両立するのかな。無理に、「めざす姿」を書かないで。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

推進していくために、どういうプロセスを踏んでいくべきかということを書くということですか。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

そういうことであれば、齟齬がないかと思います。「将来像がこうですよ」ということを、意見を聞かない中で言ってしまったら、「へー」で終わってしまう。「そう考えてるんだ」で。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

パートナーシップをうまく活かすためにいつも気をつけていることは、どれだけ参加の意識を持っていただくかということ。とても難しい。関われる余地を残す、というとおかしいですが、関わってもらえるような余白を作るといことがパートナーシップには重要ではないかと思います。今、道庁が作っているものは余白がないように感じるので、逆に、広めようとするときにどうやって関わるのかというところが見えづらい。しかし、昨日、SDGsの勉強会のようなものをやった際に具体的に何をしたらいいかわからないという意見もあり、実はそれが大半だと思います。具体性を出していく必要もあるけれども、それとは何かということ、やはりその道をやられている方や専門家の人たちからの「こういうふうにする」といった説明があるといい。作るのは道庁と一緒にやった方がいいものができるのではないかと思います。少し矛盾していますが、最初の一步、既に意識をもってやっている方の参加を促すには余白が必要で、それ以外のまだ意識がない人たちにとっては、より具体的なものがいいと思う。その両方が必要で、それを一個にしようとしているのが、すごく無理があるように感じ、きれいに分けられないものかと思っています。推進方法などになってくるのかもしれませんが、そこをうまく分けられたらすごくいいなと思う。私たちが今言っているのは「余白を作ってくれ」ということ。道庁の仰っているのは後者の具体的な方。そこがかみ合っていない理由かと感じました。そこを整理して議論できると、もっと建設的な議論になるのかと気がしました。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

分けるということもそうですが、僕はこの機会を上手く使って、2030年の北海道の姿を色々なグループで考える集まりができるといいなという提案をしていて、全部はできないかもしれないが、いくつかはやろうと思っています。ある意味、SDGsを知らなくてもできるわけです。2030年にどういう北海道であって欲しいのかということとは皆が考えられること。それが結果的に、北海道のSDGsのビジョンな訳ですよ。SDGsという言葉は広まったほうがいいですが、別に知らなくてもできることなので、今、有坂さんが言ったように、ぎゅちり埋めてしまわないで、それをうまく使うことが、逆に言えばSDGsをうまく広げることにつながると思う。SDGsという言葉の問題では無く、2030年までに私たちの世界をこういうふうにしていこうという目標がSDGsであり、それを北海道という地域に落とし込んで、自分が北海道をこうしたいというところから始まるのが一番いい。これまでもそうやってきましたが、北海道が策定するビジョンとうまく重ねられると魅力的だし実質的なので、いいチャンスだと思って提案しています。

(中小企業家同友会・清水 誓幸)

私も、小泉さんが言われたように、今回道庁と懇談会をやれるというのはチャンスだと思います。企業や多くの人達が、気がついてくれることによって、そこで働いている人達も、健全で幸福な生活が送れるよう、環境が変わっていくことを期待したい。今回は本当に

チャンスにしたい、道庁と一緒にやることによって、北海道で一番多いのは中小企業ですから、中小企業が変わっていく、中小企業で働いている人達が意識していく、そういう中で子ども達を育てていく、そして北海道が変わっていく、という姿を描きたい。そのチャンスにしたいと思い、参加させてもらっています。意識の低い経営者や企業さんもいると思いますが、その方々が少しでも気がつき、そして取り組むことによって、働きづらい環境から働きやすい環境に変わり、ブラック企業がホワイトに変わっていく。そして環境に対する意識も強くなる、そういうものに結びついていきたい。目指すものは重たいと思いますが、チャンスにしたい、きっかけにしたい、と強く思うのです。決して、意識が低いことが問題だと思っているわけではない。でもこれをチャンスにしなければ、変わるきっかけはなかなかない。何かきっかけを作らないと。それが今回、道庁が未来都市として選ばれ、そしてこれの推進を図ろうとすることをチャンスとして、僕らとしても、それを企業のなかに浸透させるきっかけにしたいと思っています。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

先ほどの皆様の提案と、その後のそれぞれお一人ずつのお話を聞いて、二つの考え方があったかと思っています。一つは世界で輝くとか、強みを生かすという考え方。もう一方は、誰一人取り残さないとか、一番困難がある人を支援する、弱みを底上げしていくという考え方。私は両方の意見、両方の必要性があると考えます。というのも、皆様の活動を見ていて、困難を抱える方の支援をしている方は「誰一人取り残さない」を重視しがちと思うし、高みをより引っ張り上げていく活動をされる方は「世界で輝く・強み」の意見になりがちかと思っています。ジェンダー平等の分野で言うと、「ガラスの天井」という言葉を聞いたことがあると思うのですが、例えば、管理職に女性がなれないとか、政治家に女性が少ないといった意思決定する立場に女性がいないといった問題。「ガラスの天井」の問題はすごく重要な問題です。一方で「べたつく床」という言葉もあります。最底辺のところから中々まともな生活に上がれないといったこと。両方大事だと私たちは考えていて、どちらが優先事項でどちらが後ということではなく、両輪でやっていくことが必要と考えていますので、そういう意味では、両方の価値を入れていただきたいと思います。「キラキラ系」も「困難を抱えている人達」も、「誰一人取り残さない」という意味でも両方とも北海道に必要だと思っていますので、両方の価値を入れていただきたいと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

提案いただいている骨子案の中では、見る限りにおいては取り残さないという方があまりに薄いというところが気になる人が多いと思います。強みをまったく活かさないという選択肢は無いと思いますが、取り残されている人達をもう少ししっかり入れていかないと、小泉さんも仰っていましたが、SDGsの目指すところと大分本質的にずれてしまうのではと心配をしていましたが、今、仰っていたとおり両方が大事だという気がします。今のご議論の中でも、推進のための方策を書いていきます、その中でビジョンは色々な方の意見を聞いてやっていかないと行けない、進捗管理するにも全ての関係者が関わる仕組みを持ってないと行け

ません、みたいなところと少し混同していると仰っている部分をかき分けていくというのは、  
どういうふうになっていくのでしょうか。骨子案が出ていて、それをどこまで聞いていただ  
けるのか聞いてみたいと思いますが、その二つを整理するとすればどんな形になり得るの  
でしょうか。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

骨子案というのはビジョンを作るための構成のようなイメージですよね。これをもってビ  
ジョンを作るということではない。少し分からなくなってきました。

(石川計画推進課長)

骨子案をベースにしてビジョンを作ります。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

ということは、「ビジョンです」というような文章が出てくるということですか。作るに当  
たったの考え方や状況というのが骨子案に書かれている。ビジョンの原案、こういうビジョ  
ンでいきますという文章が出てくるのが原案ということですか？

(石川計画推進課長)

ビジョンの形になったものが原案です。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

ビジョンというのは、骨子案で書かれた全体を「ビジョン」と呼んでいる、呼ぼうとして  
いるというわけですよ。

(石川計画推進課長)

そうです。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

骨子案の構成と別にビジョンという文章があるイメージではないですよ。

(石川計画推進課長)

骨子案でお示ししたビジョンがありますが、それに肉付けしていったものが原案です。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

項目に文章を埋めていくイメージですよ。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

骨子案が骨格になって、ここで言われた意見が原案で出てきて、そのあとビジョンの案に

なる。では、ビジョンは出てくるということですか。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

そうではなく、全体を「ビジョン」と呼んでいる訳ですよ。

(渡邊計画推進課主幹)

「ビジョン」とは、ワンフレーズで作る文章のビジョン、そういうものも含めさせた全体を、現状と課題から推進方法までの全部を含んだものを、一つの冊子として「ビジョン」というふうにしている。

(JICA 北海道・野吾 奈穂子)

それはたぶん今までの定義ですよ。今日出ていた話を踏まえると。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

そこはちょっと混乱の基になる感じがします。

(JICA 北海道・野吾 奈穂子)

そこを分ける方策はありますか。そもそも、分けていただけるのでしょうか。

(石川計画推進課長)

先ほどご議論ありましたビジョンとプランを別に作るという議論は、今のところ考えてはいないです。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

今更プランに変えるというのは難しいかもしれませんが、ビジョンの策定の仕方のようなところを、今、出せるのは出すものなのかな。ビジョンの策定も含めた推進の仕方のようなところを、道庁が考えていますよね。それを「ビジョン」と呼んでいるので混合してしまう。

(JICA 北海道・野吾 奈穂子)

ビジョンについても、前に有坂さんが定期的に見直していくようなメカニズムを組み込むという提案をされていたと思います。懇談会としては、最低限、そういうことが必要だと思います。

(石川計画推進課長)

ご意見いただいているので、見直していくということ、どのように書いていくかということ、今、検討している最中です。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

例えばビジョンの推進などにそういったことを入れていくということですよ。全部をもって「ビジョン」ということになるのです。

(石川計画推進課長)

全部をもって「ビジョン」と呼んでいます。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

本来的なビジョンは、「めざす姿」のところだと思います。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

そのようなイメージをしています。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

言葉の意味的なビジョンとしては。

(石川計画推進課長)

「めざす姿」を達成するためにどういう取組をしていくのか、というのが「ビジョン」ですよ。ですので、「取りまとめコンセプト」(注:「地方創生に向けた自治体SDGs推進のあり方」コンセプト取りまとめ)(2017/11/29自治体SDGs推進のための有識者検討会))で言っているように、あるべき姿を描いて、それを達成するためにどういう取組をしていくのかとしています。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

例えば、私が国連のアジェンダの世界を北海道に変えたものは「私たちのビジョン」というところだけを抜き出したのですが、あれはまさに「めざす姿」。

(石川計画推進課長)

あるべき姿ということですよ。

(谷内計画推進担当局長)

あるべき姿に向けて取り組む方向性も書きましょうというのが「ビジョン」ですよ。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

道としては枠組みとして、もっと広いものを考えている、ということですよ。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

日本政府の実施指針みたいなものをイメージされていますか。実施指針にはビジョンが書いてあって、本当に短く書いてあって、これが「めざす姿」に当たるころなのかと思います。実施指針のようなものを「ビジョン」と呼んでいるという理解をしていたところですが。

(谷内計画推進担当局長)

実施指針だと5ページくらいのものですよね。我々のビジョンというと、もっと具体的なものを考えています。

(石川計画推進課長)

実施指針では国の政策でどういうことをやるかということを書いてある書きものですよね。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

実施指針のなかに色々なステークホルダーの取組が書いています。それに近いものをイメージされて、それを「ビジョン」と呼んでいるのですか。それだと理解ができます。

(谷内計画推進担当局長)

国の実施指針のようなにもあるニュアンスは骨子に入っていると思います。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

形としては、実施指針が「ビジョン」に近い感じだと思っております。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

ビジョンの位置付けとして、一つ目に指針と書いてある。ですので、それこそ今おっしゃっていた実施指針と同じように使われていて、二つ目のガイドラインというのが、具体的な取組イメージ、それを併せたものということでもいいですか。

(谷内計画推進担当局長)

推進プランと言われている、どのように推進していくかということも「ビジョン」の中に入れ込んでいる。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

具体的な取組イメージは資料3のイメージで募集していこうという提案がありますが、これは具体的な行動事例・先進事例のようなもので提示する感じになり、8月29日までに我々が出すということですか。

(石川計画推進課長)

我々も作業している最中ですが、皆様からも行動事例等をお持ちであり、提供いただければ、それを踏まえて書いていきたい。

(中小企業家同友会・清水 誓幸)

この件について疑問を持ったのですが、先進的な事例と言っても、こちらから見たら先進

的な事例だけれども、他からみたら、というそもそも論がありますよね。それは誰が精査、審査するのですか。SDGsの目線で考えたときに、どちらを取るかというのは誰がみるのでしょうか。それがこれから一番取り組んでいくときに一番重い決意だと思います。それをはっきりしないうちに先進的事例だと言っても、真逆なものが先進的な例として出される可能性もあると思う。そういう仮定を考えておいた方がいいのではないのでしょうか。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

道庁の中でも事例を探していると仰っていましたが、まさに清水さんが仰っていた件は私も思っていて、誰が選んで先進事例として出すのか、道庁の担当者の方の責任で出すのか。それが少し心配で、具体的な行動指針や行動計画といったものは、やはり別途議論した上で、色々な方も参画した上で作っていかねばいけないのではないかという気がします。議論が堂々巡りになっていますが、今、私が回しているのは、私の個人的な興味で、皆様から紙で出された意見を項目毎に整理したもの、今朝、大崎さんからいただいた後にまとめたもので、漏れや言いたいことと違うことが書かれているなどあるかと思っています。実はけっこう共通して仰っていることもあり、今日の話の中で「私はそうは思わない」という意見もありましたが、私の意見を言わせていただくと、一番大事なのは、このビジョンの必要性のところの二つ目の「SDGsの理念要素をしっかり踏まえるべき」だろうなという感じがしています。皆様が仰っていたとおりの語句ですが、経済・社会・環境の調和というところで北海道の強みを活かしてどうやっていくかというところは充分書き込めると思います。むしろ、SDGsの一番の理念である「誰一人取り残さない」ということをどのように全体を流れるトーンに仕上げていくのかを是非考えていただけたらと思います。それが皆様の総意なのかと。その策定スケジュール・プロセスについては皆さんからご意見いただいたとおりですが、今出てきた行動計画や行動指針みたいなものと、いわゆるビジョンと呼んでいる、これからの推進のためにどうあるべきか、ということを手く分けて、今の制約のある骨子案の中で分けて書けるのではないかと考えています。必要なプロセスを書き込むことが大事なのではないか、皆様からの意見だったと思います。これは今年中に作らなければいけないとしたら、それはそれとして、そこに書くべきことは今後どうするかということをしっかり書き込んでいただくことが何より重要なのではないかと。そうでなければ続かないような感じがして、作って終わりになる感じがしますので、無理して具体的な事例集を取り繕って集めて載せるよりは、こういうプロセスで作っていくということを書いていただくのがいいかと思っています。皆様からの出された紙も見つつ、今日の皆様の意見も聞きつつ、思っていたところです。あとは羅列といいますが、皆様のものをコピーペーストして書いてあります。これで何かをしようと思っているのではなく、私の頭の整理のために作ったものですので、少しでも皆様の頭の整理に役に立つのであれば使っていただければと思います。優先課題はもう出されていますが、やはり、SDGsという枠組みを上手く使い、北海道ではどこが遅れているのか、何が一番必要なのかというところをしっかりと精査された方がいい。よくあることですが、SWOT分析で、強みや弱み、機会や脅威が出ていますけど、ビジョンを見ると弱みのところの分析が少し弱いような気がしました。後は具体的に小泉さんからいただ

いたような細かい提言を載せたつもりです。せっかく作ったので持ってきましたが、私のお願いとしては、今日の発言していただいたこと、今日の意見について、私の興味としてまとめていきたいので、「これ違うよ」や「もっと言いたい」、「私はこう思わない」など思うことがあれば、私にもフィードバックしていただければと思います。これをどのように使うかまで考えていませんが、先ほど、今後の原案作りを道庁が進めるプロセスの中でも、我々から意見をいう機会があると仰っていただけたので、皆様の意見をうまくこれで反映できているものであるとすれば、これに足していただいて、私の個人的なメモとして道庁さんにお渡しして、参考にしていただければありがたいという気がしています。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

同じことしか言ってないのですが、関連して、前回からステークホルダーの捉え方ということで、具体的に明記が必要で、特に脆弱な立場に置かれている人の明記が必要だということ色々な形で出してきましたが、現時点で原案の中で、道としてステークホルダーをこういうふうに捉えたいというものはありますか。私が出したものに引きつけていけば、先住民が入っているかどうか、これがかなり大きなポイントです。

(石川計画推進課長)

少し話がずれますが、そもそもの話として、ステークホルダーという言い方がいいのかという議論もあり、少し分かりづらいという意見もあります。それと、アイヌ民族についてはビジョンの中で当然言及すべきと言う意見が多い、私自身もそう思っています。しかし、どういうふうに書き込めるのか、まだ考えが決まっていませんので、引き続き検討していきたいと考えています。しかし、先ほど言われた13グループの個々の配慮すべきステークホルダーという出し方ではなく、座長からご指摘がありましたけど、全体の考え方として、「誰一人取り残さない」という理念を盛り込めないかというふうに思っている。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

「誰一人取り残さない」を盛り込むことは、SDGsである限り、前提だと思いますが、「誰一人取り残さない」というのは具体的に誰なのかについて踏み込まないと、ダメだと思います。踏み込んでいますよ、少なくとも国連では。アジェンダを見ても列挙しています。何度も書かなくてもいいのではと思うくらい列挙する。それはまねした方がいいと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

すいません、少し時間が超過して次のご予定がある人もいらっしゃると思いますので、まとめなければいけないのですが、お配りしたものは後ほどメールでファイルを送りますので、ご意見を書き込んでいただいて、一両日中くらいに返していただくと大変助かります。皆様の意見を入れたものをもう一度回覧させていただいて、私の責任で道庁に出していいということであれば、出したいと思います。ネットワークの話しをまったくしていなく、すいません。ご意見があまりでていませんが、何かネットワークについて、言っておきたいこと

はありますか。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

小泉さんの受入になってしまいますが、道庁がやるので、是非、179市町村と振興局は必ず入ると、義務的にしてしまっただけではいかがか。現在、募集であるので、興味のあるところは入ろうかなという声が聞こえてきますが、ここで声をかければ、全市町村に情報が届く体制を作っただけではいかがかと思います。また、ネットワークの活動内容に、連携・協働した取組の実施と書いてありますが、これは具体的に道庁がコーディネートするということですか。

(渡邊計画推進課主幹)

振興局は道庁ですので、入るという形ではなく、運営側に回る形になります。市町村に関しては、中々このご時世、義務で入るといような強制する権限は我々にございませんので、そこまでは言えませんが、当然、全部の市町村に入っていただきたい気持ちは持っています。募集を開始してから2週間足らずですが、30を超える市町村から参加の申込をいただいております。照会等もたくさんいただいておりますので、これからどんどん入ってきていただける、また、入ってこられないところには働きかけをしていかなければいけないと考えております。連携・協働した取組については、ネットワークが取組を広げるためということで、情報交換・情報共有の場という方向で進めておりますので、出来れば実際に集まって話しする場を提供していきたいと考えております。そういう中で次のステップとして、連携・協働した取組に繋げていくようにしていきたいということで、実際に道が関与して、例えば、インキュベーターのようなことをやるかどうかについては、今の段階ではなんとも言えない状況です。予算も絡む話しですので。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

私はRCE道央圏の運営委員でもあるので、RCEの会議で渡邊さんとは話しはしていますが、改めてこの場でも少し経緯を確認しておいた方がいいのではないかと思います。RCE側から見れば、RCEはESDの地域拠点ですけれども、設立時期の関係もあり、目的の中にSDGsの達成ということも明確に入れているということもありますので、事実上のSDGsのネットワークにも成っていた。しかし、RCEといっても分からないので、SDGsのネットワークやプラットフォームなどといった打ち出しが必要だという議論があるところに、ちょうど道の人を考えていた時期とも重なり、協働事務局という話しになったと思います。しかし、道側の都合でといたしますか、道側の判断で協働事務局というのとはなくなった。しかもあまり確認のないまま下ろされたという経緯だと思うんですね。RCEとの議論の場ではないですが、私がきちんとした方がいいと思うのは、RCEでもSDGsのプラットフォームを立ち上げた方がいいという話しは今も継続しているので、道が既に打ち出しているものとの性格を分ける、意見としてはネットワークではなくメーリングリストという名称にして欲しいというような意見もでていますが、そのような配慮というのが少し必要ではないかと、少し他人ごとのように言っていますが、思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

皆様も覚えていらっしゃるかもしれませんが、前回の会議資料では、このネットワークについての概要のようなものが1枚配布され、RCE道央圏が共同事務局として機能していくという案が示されておりました。私も前回、こういうものがすぐ機能していくのならば、実質、ビジョンの実施と策定が平行して進んでいくということで、サポートするような発言をした記憶があります。その後、先ほどのご説明もあったように、道の責任でまず立ち上げて始めるということが、懇談会にはまったく知らされず行われたということでございます。その辺りをもしご説明いただければ。

(石川計画推進課長)

経緯は小泉さんが仰っていましたとおりで、道側もネットワークを作るべきではないかという議論を内々でやっています、RCE側で全道的なネットワークというお話もありましたので、共同というようなお話を我々から持ちかけさせていただいていたところでした。そうした中で、先ほどSDGsの道内普及率が低いというようなお話をしましたけれども、やはり我々のところに、具体的に何をしたらいいか、連携して何かやりたいが、どこがどういう取組をしているのかわからないといった問い合わせが増えてきたものですから、極力早く立ち上げるべきではないかという判断に至ったというところでした。その中で我々が立ち上げようとしている北海道SDGs推進ネットワークは、取組を行っている人あるいは関心のある人に自由に参加いただくような、緩やかなネットワークという位置付けにしています。そういった中でRCEさんだけに入らせていただくよりは、我々がまずは一義的に立ち上げさせていただいて、その取組の中で連携をさせていただきたいなということでそういう手続をさせていただいたところでした。手続的に非常に申し訳なかったのは、会長や有坂さんには事前にお話をしていましたが、それがRCEさん全体の手続との齟齬が生じていたもので、その辺りは非常に申し訳なかったと思いますが、なるべく早く立ち上げるということで今の形になっています。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

ご説明はいただきましたが、事後報告だったと思います。「こうなってしまいました。」という形だったということだけは、保身ではないですが、誤解のないようにしていただければ。金子代表と私が了承したというふうに捉えかねられないので、そこだけは誤解のないようにしていただきたいと思います。しかし、道庁もRCEの会員ですので、一緒にやっていきたいということはもちろん思っていますので、どういう形にしたら上手くできるのかということを考えられればいいかなと思います。ご事情があるのはよく分かっているつもりです。ただ、何らかの形で、小泉さんが仰っていたみたいに、多様なステークホルダーの人たちが入っている持続可能な社会を実現するためのネットワークというものは、今現在、RCEしかないと言っているかと思います。そういった状況の中で、道庁さんが多様なステークホルダーとの連携を考えられるのであれば、RCEを使ってもらえればいいというふうに思ってい

て、その他の存在をいちいち集めるのではなく、既にそういったプラットフォームがあるということだけをご理解いただきたいです。RCEは法人格もありませんし、道央圏という名前がついているというところでネックになっているのかもしれませんが、実質的にプラットフォームの役割を果たしているのはRCEだけだと思っておりますので、活用をしていただき、上手く協働・連携できれば一番いいかと思っております。ですので、個人的に、道庁にやっていただきたいこととして、先ほど大崎さんから全自治体に入って欲しいというような意見もありましたが、難しいとは思いますが、道庁だからこそ声をかけやすいということがあると思います。今、ご担当されているのが総合政策部というところで、色々な部局に対してのパイプがちゃんとあるという状況の中で、部局に対してSDGsの優先しているものを一つずつ出してもらうことをやっていただいたり、先ほど指標を作る中で、照会して出してもらうといった話がありましたが、SDGsに深く関わる重要なところだということをそれぞれに考えて出していただくということなどをやっていただきたいです。各市町村に対して、SDGsで一番押しているところのようなものを出してもらうことや、14振興局単位で、モデル都市のような市町村を一つずつ上げていただき、その人たちに集まっていただく機会を作り、そこに多様なステークホルダーが入って議論ができるような機会を作るなど、道庁でしかできないことだと思っておりますので、道庁しかできない役割というのをしっかり考えていただき、道庁で全てカバーするという考え方ではなく、道庁がやるべきSDGsということを考えていただくと非常に深くありがたいという気がしています。その部分で一緒に連携できるといいなという気がしています。具体的な実行の話になってしまうかもしれませんが、自治体とのパイプという強みをSDGs実現に向けて発揮していただくことがいいと思っております。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

この作ろうとされている計画の中でも、推進のための重要なメカニズムだと思っておりますので、既存のRCEとの役割分担や協働のあり方といったところも今後もRCE側とも調整していただき、書き込める問題は書き込んでいただくのがいいのかなという気がします。よろしくお願いします。すいません、時間がどんどん押してしまって。また、まったく何も結論が進まないまま終わってしまいました。今年中に何らかの形でビジョンと呼ばれているものを作り上げるということは外せないという道庁の強いお考えを踏まえつつ、また、空気に対してどうやってものを言うのかということも認識しつつですが、できるだけことは言っていきたいと思っております。皆様のご意見をこれからも、直接道庁側に伝えていただければと思いますし、もし私の書き始めたものが少しでも参考なるのであれば、それに書き足していただき、まとめた形で出せるのであれば出し、できる限り道庁に考慮していただければと思います。これ以上のことは何もできないかという気がします。9月の公表の時に見て、「なんだこれ」ということにならないように期待しつつ、難しいというのは重々承知の上、重ねてお願いさせていただけるとすれば、公表前にできるだけ何らかの形で、「こんな方法で考えています」というようなことだけでも、懇談会のメンバーにお知らせいただければありがたいと思います。具体的なものを見せていただく必要はないと思いますが、ご指摘したことに

については、「このような形で具体的に書き込む方法で進める」というような、プログレスレポートを聞きたいという気がしておりますので、それも合わせてご検討いただければ大変ありがたいと思います。このようなところで終わっていいのでしょうか。私にも、少し違うのではというようなことをメールでもいただければと思いますので、よろしく願いたします。では、マイクを事務局にお返ししてもよろしいでしょうか。よろしく願いたします。

(石川計画推進課長)

本当に本日も熱心にご議論をいただきまして、ありがとうございます。本日の懇談会はこれをもって終了させていただきますけれども、先ほども申し上げましたが、当初10月下旬で3回目を開催して終わるというようにお話しをさせていただきましたが、10月の中旬くらいに3回目を開き、そのときには意見に対してどのように整理させていただいたかというものもご紹介させていただいて、またご意見をいただければなと思っています。それは最終案に向けて、「このようにすべきではないか」というようなご意見になるかと思いますが、そういったご議論をいただきたいなと思います。先ほど少し申し上げましたけれども、ビジョンの出来上がった段階で最後かなと思っていますが、それはまた考えさせていただいて、別途ご相談をさせていただければなと思っています。これで今日は閉めさせていただきますけれども、引き続きどうぞよろしく願いたします。ありがとうございました。